

2015年度 成果概要 ③

「仏教・浄土教を機軸としたグリーフサポートと救済観の総合的研究」 Reach on Grief Support and Salvation based on Pure Land Buddhism Thought

■成果概要

2015年度は龍谷大学研究高度化推進指定プロジェクト最終年度にあたる。龍谷大学赤松徹眞学長を初め、共同研究者、研究部関係各位のご支援に心から感謝申し上げたい。

本研究プロジェクトの特色と成果は、第一に、グリーフサポートの実践モデルの開発的研究（ユニット1）と、仏教・浄土教を機軸としたグリーフサポートと救済観の研究（ユニット2）を大学院教育と結びつけて推進したことである。この推進策により研究成果が教育や社会に還元される。東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座（2012年創設）と連携協力して、2014年度から龍谷大学大学院実践真宗学研究科においても「臨床宗教師研修」を開設し、東北大学の鈴木岩弓教授、谷山洋三准教授を初め、最前線の研究を特別講義で学び、2015年度までで臨床宗教師25名（認定臨床宗教師3名を含む）を養成することができた。第二に、学術的には、2015年11月12日に、シンポジウム「医療・看護の臨床現場から求められる仏教者」を開催し、日本赤十字看護大学名誉教授の川嶋みどり氏に基調講演をいただき、田畑正久教授、早島理教授、長倉伯博ビハラー僧による発表が行われた。生と死のナラティブを傾聴し、一人ひとりの人生の物語を紡いでいくことを、医療が宗教者に期待していることが明らかとなった。2015年11月30日には、「ヒロシマ被爆70年追悼 特別上映 知られざるヒロシマの真実と原爆の実態」が開催され、500名以上の参加者があった。被爆の悲しみを超える道が、怨みに怨みを報復することではなく、怨みを慈しみに転じて、平和を願いつづけるところにある。原子爆弾の悲しい現実を被爆者に学び、その被爆体験を自分自身のことのように受け止めて、未来の世代に伝え続けることが求められる。2016年1月21日に、シンポジウム「臨床宗教師研修の反省と新展開」が開催され、鍋島教授、臨床宗教師柱本惇氏の発表を踏まえ、東北大学の谷山洋三准教授からのレスポンスが行われた。臨床宗教師とは、病院、社会福祉施設、被災地などの公共空間で、人々の悲しみに寄り添う宗教者であり、布教・宗教勧誘を目的とせず、相手の価値観を尊重しながら、生きる力を育む。その際に重要なことは、過程を尊重することである。葛藤や怒りをぶつけるようなけんかも理解しあえるチャンスであり、結論を急がずに、なぜそういう思いになっているのかを仏の大悲に照らされて振り返る時に、和解する道も生まれてくる。特筆すべき成果は、一つは、全国初、京都府と龍谷大学大学院が連携して自殺対策に取り組み、臨床宗教師による自死遺族支援を行うために「京風カフェデモンク きょうのモンク」を2016年3月4日と3月7日、長岡京市と福知山市で開催したことである。京都府と臨床宗教師との連携によって、公共空間において宗教勧誘を行わずに、誰にもいえない自死遺族の悲しみをそっと傾聴し、臨床宗教師にしかできない心のケアを行った。

もう一つの成果は、上智大学グリーフケア研究所、東北大学大学院、龍谷大学大学院が中心なり、全国の臨床宗教教育に携わる大学研究者らと相集い、日本臨床宗教師会を2016年2月28日に設立したことである。その設立趣旨は、島藺進会長のもとで、谷山、鍋島が起草し、全国の理事と推敲して発表した。その冒頭にはこう書かれている。「人はさまざまな苦難の中で自己の支えを失ってしまい、「なぜこのような目にあうのか」「生きる意味はどこに」と頭をかかえます。『日本臨床宗教師会 (Society for Interfaith Chaplaincy in Japan)』は、困難にあえぐ人々の悲しみに寄り添いつづけた宗教者の伝統と臨床経験を尊重し、志を同じくする宗教者、「臨床宗教師」の養成に取り組む諸大学の研究者、医療、社

会福祉等の専門職、臨床宗教師研修修了生の有志等が集い、相互に研鑽し、「臨床宗教師」に関する倫理綱領の遵守、養成教育・継続教育の支援と連携、実践と教育に関する研究、啓発、資格認定、関係諸機関との連携を推進することをめざして設立いたします」。これを忘れずに研究教育を進めたい。NHK international、MBS 放送や日本経済新聞社、産経新聞社、毎日新聞社、朝日新聞社等に紹介された。

この成果概要は、理論面と臨床面からみることができる。

第一に、理論面では、仏教・浄土教を機軸としたグリーンサポートと救済観を解明するために、「グリーンケア論研究」（黒川雅代子）、「実践真宗学研究」（深川宣暢）、「平和・人権論研究」（高田文英）「ビハーラ活動論研究」（鍋島直樹）等を臨床宗教師研修として開講した。仏教・浄土教を機軸としたグリーンケアの特色とは何か。それは、生死を超えた救いを指し示し、死者と生者の物語を紡ぐことであるといえるだろう。

宗教者の社会的実践の姿勢について、親鸞教義に基づいて研究した。唐代の善導は『往生礼讃』に、「自信教人信、難中転更難、大悲伝普化、真成報仏恩」と記し、親鸞は「大悲をもて伝へてあまねく化する」と読んだ。他面、親鸞は、その文を『教行証文類』「信巻」と「化巻」の二か所に引用し、智昇編『集諸経礼懺儀』に掲載された善導の『往生礼讃』の文によって、「大悲伝普化」を「大悲弘普化」と書き直している。私の行為が大悲なのではない。如来の大悲が私を通して十方世界にひろまり教化すると親鸞は理解した。また、親鸞は念仏者の姿勢についてこう記している。

としごろ念仏して往生をねがふしるしには、もとあしかりしわがこころを おもひかえして、とも同朋にねんごろにこころのおはしましあはばこそ、世をいとふしるしにてさふらはめとこそ、おぼえさふらへ。（『末灯鈔』19通）

したがって親鸞における社会的実践の姿勢は、自他ともに如来の光を平等に受けている同朋として、自らの悪を省み、相互に思いやりをもって生きる姿勢である。宗教者が相手を尊重できるのは、自己の支えが確かであるからである。一人ではあっても常に如来と共にあるという覚悟があるからである。親鸞浄土教を機軸とし、心のケアを実践する宗教者の依りどころには、いかなる境遇にあっても、一切衆生が仏に願われているという阿弥陀仏の本願がある。生死を超えて浄土に往生し、必ずまた心の故郷、浄土で会えるという死生観がある。こうした大悲のぬくもりと自己を支えるものとのつながりが自己を突き動かし、葛藤や無力感に心揺れながらも、なお相手を慈しむ姿勢が生まれてくる。こうした如来の大悲にいだかれた愚者の実践があるだろう。

第二に、臨床面では、臨床宗教師研修を研究面から推進する役割を有した。臨床宗教師は、日本版チャプレンであり、岡部健医師が提唱した。臨床宗教師 (interfaith chaplain) とは、病院、社会福祉施設、被災地などの公共空間において、宗教勧誘を目的とせず、相手の価値観、人生観、信仰を尊重し、生きる力を育む心のケアを実践する宗教者である。医療、社会福祉の専門職とチームを組み合わせながら、宗教者として全存在をかけて、人々の苦悩や悲歎に向きあい、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を行う。臨床宗教師は、ケア対象者の話を真摯に聴き、その混沌とした苦悩、非合理的な体験をあるがままに受け容れる。自分の生きる意味とは何か、死後どうなるのかについて、相手と共に考える宗教者である。臨床宗教師は、宗教宗派を超えた協力関係 (interfaith partnership) を結ぶ。宗教者間の調和によって、宗教にまつわる「信者獲得」や「対立」という印象も払拭される。

そうした臨床宗教師研修を推進する研究者が集い、日本臨床宗教師会が 2016 年 2 月 28 日に設立された。『日本臨床宗教師会』は、現場に立つ者と教育を担う者が協力して、臨床宗教師の教育と実践を支

援し、そのあるべき姿を検討する共通基盤を構築してまいります。将来的には、臨床宗教師が新しい専門職として心のケアを実践するために、臨床宗教教育の継続研修に基づいて「臨床宗教師」資格認定制度を確立することを視野にいれています。さかのぼれば、チャプレン、教誨師、パストラルケアワーカー、ビハーラ僧、スピリチュアルケアワーカー、スピリチュアルケア師、臨床仏教師、もしくは寺社教会の内外での社会貢献などさまざまな形で、宗教者は世界の安寧を願い、苦悩する人々のために献身してきました。『日本臨床宗教師会』は、こうした先駆者たちに敬意を払いつつ、公共空間でケアを提供する宗教者の研鑽と、学び合いの場を作ります。大いなるものの慈しみにいだかれて、謙虚に自己をふりかえります。そして、あらゆる領域において、苦悩する人々に寄り添い、祈り、願い、光を届けられるよう、貢献したいと思います」。宗教者間協力による臨床宗教師の実践を研究面から支援し、スピリチュアルケアと宗教的ケアの意義を医療者と共に考えることが継続課題である。

こうした成果を踏まえ、2016年度から人間・科学・宗教オープンリサーチセンターは、世界仏教文化研究センター応用部門の常設研究班として位置づけられた。

龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門

常設研究班「人間・科学・宗教オープンリサーチセンター」

平成 28 (2016) 年度からの常設研究テーマ

「世界の苦悩に向き合う仏教の智慧と慈悲－仏教の実践的研究」

Buddhist Wisdom and Compassion in Response to World Distress: Practical Buddhist Studies

今後の課題は、スピリチュアルケアと宗教的ケアの関係、宗教的ケアを支える仏教・浄土教の死生観、救済観の研究であり、その成果をまとめてDVDや書籍出版することである。文献解釈学に基づく教義学、歴史的脈絡と発揮をみる浄土教理史、死生観とグリーフケアに関する学際的研究、実地調査(Field Study)と臨床実践と反省(Clinical practice and Reflection)から解明する実践宗教学、実践真宗学が相互に学び合い、世界の苦悩に寄り添う仏教の可能性を探求していきたい。